The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	周産期をめぐる看取りケアの現象学的記述
Author(s)	戸田, 千枝
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/72463
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　戸田千枝　）	
論文題名	周産期をめぐる看取りケアの現象学的記述

論文内容の要旨

我が国の周産期医療の進歩はめざましく、戦後に高率であった周産期死亡率は、世界トップレベル水準の医療体制によって著しく減少した。しかしながら、すべての子どもが健康で生まれてくるわけではなく、胎児として形成される以前の胎芽期を含めると、10から15パーセントは流産するとも言われている。このような現状の中で、周産期の医療者は、一方では誕生を見守る支援を行いながら、他方では子どもの死の場面を数多く経験している。そのいわば誕生と死の両極端の経験を重ねることは、ケアをする助産師たちの心を大きく揺さぶり、とりわけ亡くなった子どもが生まれ出てくる場面で分娩の介助を行う助産師達は、自分のどこかにしこりを残すような経験であったと語るものは少なくない。欧米では、1950年代にボウルビィやクラウス＆ケネルによって、子どもを亡くした親の心理が著され、日本の周産期でも1990年代頃から、子どもを亡くした母親たちのケアのニーズに注目した調査や、ケアに対する看護者の主観的評価が調査されてきたが、それらはケアの有効性を分析したものであり、子どもの死の場面をケアする経験が、助産師に何を働きかけているのかについては、ほとんど明らかにされてはこなかった。

リフトンはベトナム戦争の帰還兵を対象とした調査の中で、「身体的もしくは心理的にきわだった形で死と接触する機会がありながら、それでも生き残った者を生存者」と定義している。リフトンに従い、子どもの死の場面を数多くケアすることを、死とのきわだった形での接触する機会として置き換えると、助産師自身が感じる心理的な傷つきは、二次的な代償性のトラウマ障害のような経験であるともいえる。昨今では、助産師自身の戸惑いや悲嘆に関する調査が行われ、特に妊娠中から妊婦のケアに携わり、胎内死亡に至るまでの経過を傍で見守るような経験をした助産師には、罪悪感がより多く見られると報告されている。

以上の事から、本論文が対峙したのは、流産や死産、選択的妊娠中絶や人工妊娠中絶をケアする助産師のケアをめぐる経験である。それらの経験が助産師たちにとっていかなる意味を持ち、その後のケアにどのように影響するのかを明らかにし看護実践を新たに捉えなおす研究である。しかしながらこれは、従来から行われてきたような、子どもを失った両親の悲嘆に寄り添うグリーフケアの方法を探索するものではなく、またケアをする者の悲嘆を問題とするものでもない。周産期の看取りのケアを経験した助産師が、すでに経験している看護実践の中にあり、それでいて看護者自身が未だ十分に言葉として表現できていない、または意味づけされていない現象に焦点をあてたものである。そして、対話によるインタビューによって語られた経験の記述を、現象学的看護研究の分析によって、子どもが亡くなる場面をケアする助産師とケアをされる対象者との間で営まれるケアの成り立ちから、経験そのものをとらえなおすことを試みた。

本論文の構成は、周産期の看取りのケアの諸問題から現象学的看護研究によって個別の経験のあり様を記述する必要性の検討と４人の助産師が語るケアの記述による試論の２部からなる。

第１部第１章では、諸外国と日本における先行研究において指摘されている諸問題を検討した。現在日本で広がりをみせているグリーフケアやペリネイタル・ロスでは、複雑で多様な個々の背景を持つ当事者との関係性やニードをつかみきれないケアの実態があり、さらには死の日常化にともなう無力感や共感疲労がケアの困難さを助長している実態から、ケアの難しさを論じた。また人工妊娠中絶のケアについては、個人的体験でありタブー視される傾向であるがゆえに、十分にケアのあり方自体が語られてこなかった実態を歴史的な概観をふまえて論じた。さらに亡くなって生まれてくる子どもを直接手で触れてケアをする死産では、複雑で多様な個々の背景を持つ当事者をケアする為に助産師が配慮してきたことがほとんど記述されていないことに注目し、その時その場所で有効であったと後になって意味づけられるような経験や、まったく力が及ばなかった経験がその後の助産師にとって、どのように影響を与えているのかを記述していく必要性を論じた。

第１部第２章では、看護行為の支えとなっている現象の構造を明らかにするために、現象学でケアを記述することを西村ユミとウィーンデンバックに依拠して論じた。ケアの経験にアプローチする調査研究の方法として、現象

学的記述の分析方法について詳細を述べた。

第２部は、本論文の根幹を成す現象学的看護研究法でアプローチした４人の助産師を対象とした調査研究である。

第２部第３章　子どもを死産した患者に２年近く応答しつづける　－A さんの看護実践－

先行研究でも指摘されてきたように子どもを失った事実を当事者が受け止めていく過程は一様ではない。Ａさんの応答の中では、患者は妊娠期が中断したまま「時間が止まった」状態だった。事実をありのままに認識するまでには、受け入れがたい心情を何度も繰り返しＡさんに語る時間が必要であり、その患者のリズムに同調するやりとりが記述された。

第２部第４章　忘れることができないケアの経験　　－Ｂさんの看護実践－

Ｂさんの語りから、死産の介助をする際には少しでも安楽となるように身体を介した疼痛緩和のケアが行われ、さらにどんな姿勢でも生まれてきたら受け止めるような、能動的な経過診断が行われていたことが浮かび上がった。そして死産する母と亡くなった子どもが主体となれるように、受け身に徹したケアが、生きて生まれてくる出産のような介助を実現させていた。語られた記述は、一回の死産の介助ではあるが、当事者に何とかして近づき寄り添おうとする助産師のケアのあり方が見えるものであった。

第２部第５章　亡くなって生まれてきた子どものケア　－Ｃさんの看護実践－

Ｃさんの語りは、無脳症であると診断されても妊娠を継続した母親を理解できるようになっていく倫理観の変化があった。その変化には、自宅出産でのケアを通して気づいた、家族の日常の連続の中に生まれてくる「いのち」を重ね合わせて理解しようとしていた行為が影響を与えていた。

第２部第６章　語ることや思い出すことを封印した人工妊娠中絶のケア：ずっと見てきた経験
－Ｄさんの看護実践－

Ｄさんが新人の頃から試し続けた人工妊娠中絶を受ける患者の「言えない気持ちを聴く」行為は、妊娠したことや中絶されてしまう胎児の存在を「なかったことにする」力への抵抗だった。この経験は、30年以上語ることや思考することにも抑止がかかっていたにもかかわらず、Ｄさんがその後に出会う患者にふりかかる困難な際には、土台となってケアを形作っていた。それは、医療者である役割を降りて「人間対人間」で患者の言えない気持ちを聴き、選択肢を増やすように一緒に他の方法を探すような独自の関係性であった。

第２部第7章　死産のケアの支えとなった中期中絶のケアをめぐる経験の語り：生まれたことを無しにしたくない
－Ｄさんのもう一つの看護実践－

Ｄさんにとっては、初めて中期中絶の介助で経験したことは、30年近く語ることや思考することにも抑止がかかっていたが、語られた記述を分析すると、Ｄさんの今でも手にのこる「心臓だけが動いて」いた感覚は、30年以上経った今でも痕跡として残る感覚でもあり、決して「無かったこと」ではないということを伝えるものだった。そしてＤさんが経験した過去全体は、母と子が確かに存在した痕跡を残すかのように、亡くなった子どもと産んだ母親の関係性をさらに深めるようなケアへと形を変えて現れていた。

第２部第8章　調査研究のまとめと課題

第3・４・5・６・７章における調査研究のまとめを行い、本研究の限界と今後の課題について触れた。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　戸田千枝　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	村上靖彦
	副 査　教授	白川千尋
	副 査　教授	野村晴夫
	副査　教授	榊原哲也〔東京大学〕

論文審査の結果の要旨

戸田千枝氏の博士学位申請論文『周産期をめぐる看取りケアの現象学的記述』は、人工妊娠中絶のケアにあたった助産師4人のインタビューとその詳細な現象学的分析を軸とした論文である。人工妊娠中絶においては、本来は生きるべきだった胎児が死に追いやられ、しかもそこに誕生をサポートするはずの助産師が「加担」することになるため、助産師には非常に大きな傷が残る。人工妊娠中絶の件数は2016年でも年間16万件程度であり（1955年には117万件）、出生数（94万）と比しても非常に多い。そして人工妊娠中絶について語ることは社会の中でタブーになっているため、経験した女性や、助産師が抱えている苦痛については「なかったことにされている」という二重の外傷体験となっていることを本論文は問いの出発点に置く。

その上で、人工妊娠中絶のケアについての詳細な先行文献のレビューを国内および外国語文献によって行い、さまざまなケアの取り組みについての整理がなされている。しかしながらガイドラインによる標準化されたケアによっては個別の事情・背景を抱えた人工妊娠中絶においてそれぞれの助産師が経験する多様な経験は明らかになっていない。ケアを構想するためにも前提となる助産師の経験を解明する必要がある。戸田氏はそのために現象学的な質的研究を方法論として選び、4人の助産師に長時間の構造化されないインタビューをおこない、その逐語録データそれぞれを詳細に分析する作業を行っている。

戸田氏による分析はそれぞれの助産師の語りを丁寧に解読するものであり、分析者の恣意性は全く感じられない自然なものであるだけでなく、（秘匿性が高く標準化されたケア技法が必ずしも行き渡っていないがゆえに）非常に個別性の高い中絶場面のケアの実践を描き出している。たとえばAさんが「〔患者が〕そこにいたっていない」と語るときの「そこ」が何を指すのかを、中絶場面に使われる「どんどん」「急いで」「ゆっくり」といったさまざまなリズムと共に描き出していく。あるいはCさんの語りにおいて冷蔵庫に胎児の遺体を「置く」と語られた表現を読み解き、アンチではなく「異常に冷たい」場所に置かれていることとそれを母親にさとられまいとする気遣いとの間の葛藤が細かく解きほぐされていく。このように、戸田氏はデータのディテールの読み込みを4人の助産師の実践のスタイルの析出に成功している。

結論として、本論文は逐語録テキストに忠実でかつ深く読み込んだ分析に達することができたゆえに現象学的な質的研究としても模範的な論文となった。個別性が高い実践についての研究であり、しかも人工妊娠中絶については語ることがタブーとなっていたこともあって標準的なケアの方法すらないという状況であるため、その個別性を尊重した現象学が最大限生きる現場であったことも本研究の価値を高めている。とりわけ、感覚や感情がケアに構造的にかかわっていることを一貫して示すことができており、今後、人工妊娠中絶のケアに携わる支援者の支援の基礎となる知見をもたらしたという点から重要な貢献を果たしたと言える。